に

国　語，数学Ⅲ・数学C　問題

はじめに，これを読みなさい。

1. 解答用紙には，あなたの受験番号が印刷されています。受験番号が正しいかどうか，受験票と照合して確認し，氏名を記入しなさい。
2. 「国語」の問題は裏面から始まります。
3. この問題冊子は，「数学Ⅲ・数学C」については表面から11ページ，「国語」については裏面から18ページあります(表紙の次の白紙2ページはメモ用紙として使用してかまいません)。必要な科目を選択して解答しなさい。
4. 解答用紙の「解答科目マーク欄」にマークし，「解答科目名記入欄」に解答する科目名を記入しなさい。マークされていない場合，又は複数の科目にマークされている場合は，0点となります。
5. 解答は，すべて解答用紙の解答欄にマークしなさい。
6. 1つの解答欄に2つ以上マークしてはいけません。
7. 解答は，必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入しなさい。
8. 訂正する場合は，消しゴムできれいに消し，消しくずを残さないこと。
9. 解答用紙は，絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
10. 解答用紙は持ち帰らないで，必ず提出しなさい。
11. この問題冊子は必ず持ち帰りなさい。
12. この試験時間は60分です。
13. (数学Ⅲ・数学C)　分数形で解答する場合は，既約分数で答えなさい。
14. (数学Ⅲ・数学C)　根号を含む形で解答する場合は，根号の中に現れる自然数が最小となる形で答えなさい。
15. マーク記入例

良い例	悪　い　例
●	◉　⊗　⬮

に

国語問題

（解答番号　1～29）

はじめに裏返して、表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. 「国語」の問題は18ページあります。

2. 「数学Ⅲ・数学C」の問題は反対の面にあります。

(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

夏目漱石の『吾輩は猫である』の書き出しの部分には、有名な「吾輩は猫である。名前はまだない」という一節があるが、ネコの世界には、名前がないのである。ネコは、環境の一部に、たとえばイワシだのカツオだのという名前をつけているわけではない。ネコは、その嗅覚だの視覚だのによって、食べものの存在を、実在として識別できるとしても、[1]ネコにとって、環境とは、無言の実在世界そのものなのだ。ましてや、みずからに名前をつけることなど、ネコには、できた相談ではない。ミケとかタマとか、人間が勝手につけた名前を、ひとつの信号音としてききとることはできるだろうけれども、それがじぶんの名前である、などとネコが自覚しているわけではないのである。

人間は、まさしく、ことばを獲得することによって、実在世界から離脱したのである。われわれは、たとえば、山をみたり、花をたのしんだり、というときには、[2]「もの」の世界とかかわりあっているのだ、と主観的にはかんがえる。しかし、山には、すでに山という名前をあたえられている以上、もはや、素朴な実在ではない。人間は、たしかに山をみる。だが、それは、人間のあたまのなかにある「山」というシンボルをいったん通過したうえでの行動なのである。野に咲く一輪の花をみても、われわれは、それをタンポポだ、と識別する。われわれの精神のなかには、タンポポだとか、スミレだとか、かぎりなくたくさんの「名前」が、「概念」として蓄積されており、その概念を経由してでなければ外界の事物の認識ができないのだ。われわれは、タンポポという名で呼ばれる花をみるのであって、虚心にその植物じたいをみるのではない。よしんば、タンポポという名前は知らなくても、それを、「花」の一種としてみてしまうのである。名前も、観念もない、無心なすがたで人間が［X］的な実在としての環境に向きあうことができるのは、おさない子どものころ以外にない。

とにかく、これまで一万年ほどの人類の歴史のなかで、われわれは、環境のすべての部分に名前をつけ、概念化を進行させてしまったのである。ラフカディオ・ハーンの『怪談』に登場する「耳なし芳一」は、悪霊から身をまもるために、からだの隅々まで呪文をいれずみのように書きこんだが、われわれをとりまく環境のすべては、いま、ぎっしりとことばで埋めつくされているか

のようにもみえる。空にかがやく無数の星は、天文学の発達によって、順々に記録され、特定の固有名詞だの番号だのによって呼ばれるようになった。いま、人間によって名前をつけられていない星は、ひとつもない。もちろん、すべての星が発見されているわけではなく、毎年、いくつかのあたらしい星が見つけられている。しかし、見つけられたとたんに、人間はその所在を記録し、名前をつけてしまう。文学的ないいかたをするなら、いまや天上には、いささかのすきまもなく、ことばが書きこまれ、われわれをとりまく巨大な環境としての宇宙すらもが、完全に概念化されてしまっているのである。

地球そのものも、ことばによって塗りつぶされた。一五世紀以来の「発見の時代」は、まず第一に、地球がまるいことを発見し、つぎつぎに大陸や島を発見した。手あたりしだいに名前がついた。太平洋にちらばる無数の島は海図に記載され、アフリカや南アメリカの内陸部ふかくにはいりこんだ探検家や地理学者は、それまで空白だった地図のうえに、いろんなことを書きこんだ。いまや地球上のすべての場所は、それぞれに名前をもたされてしまったのである。名前のないものは、いまわれわれの環境のなかにはひとつもない。ひとつひとつのものやできごとに、われわれは丹念にことばのレッテルを、びっしりと貼りつけてしまったのである。[3]地球ぜんたいが、巨大な「耳なし芳一」なのだ。いや、「耳なし芳一」は、耳だけに呪文を書き忘れたために、耳がなくなってしまったのだが、地球の表面には、もはや書き忘れられた部分は、なにものこっていないようにみえる。

シンボルの世界は、実在の世界のうえにかぶさった(ア)密度の高い皮膜のようなものなのだ、といってもよい。そして、その皮膜は、それじしんの運動法則を獲得した。いっさいの実在に、いっこうにかかわりあうことなく、シンボルの世界は自由にその独自の運動をはじめる。ひとつの花にタンポポと名前をつける、といったようなばあいには、実在と名前ないしシンボルとのあいだに対応関係があるけれども、同時に人間は、非実在的な概念をも続々とつくりはじめた。たとえば、「神」の概念などがそのいい例だ。われわれは、神というものを実在として知覚し、あるいは認識することはできない。神というのは、人間の頭脳がつくりだした抽象的で［Y］的な概念だ。それは、実在の世界から完全に離脱してしまっている。しかし、それにもかかわらず、われわれは神についてかんがえ、神についての理論体系をつくることもできる。

マンガ映画によくあらわれるギャグのひとつに、人物がガケのあるのに気づかず、空中を遊歩する、という場面がある。それ

まで地に足をつけて歩いてきた人物は、ガケにさしかかっても、足もとに地面がなくなったことをすっかり忘れて、そのまま空中を歩きつづけるのだ。そういうばあい、その人物はふと足もとを見て、足が地についていないことを発見し、その瞬間に、まっさかさまに谷底に落ちてゆくのである。われわれにとって、シンボルというのはそれに似ている。いつのまにか、対応する実在がなくなっているのに、ことばのほうは、どんどんと中空を歩きつづけ、すこしもたじろいだりしないのである。たじろがないから谷底におちることもない。われわれは、ことばをつかうことによって、[4]堂々と空中を闊歩しているのだ。

カッシラーは、こういう——

「人間は〝物〟それ自身を取り扱わず、ある意味において、[5]つねに自分自身と語り合っているのである。彼は言語的形式、芸術的イメージ、神話的シンボル、または宗教的儀式のなかに、完全に自己を包含してしまったゆえに、人為的な媒介物を介入せしめずには、何物をも見たり聴いたりすることはできない。」

「人間は[イ]固い事実の世界に生活しているのではなく、彼の直接的な必要および願望によって生きているのではない。彼はむしろ、［Z］的な情動のうちに、希望と恐怖に、幻想と幻滅に、空想と夢に生きている。エピクテトスはいった〝人間を不安にし、驚かすものは〈物〉ではなくて〈物〉についての人間の意見と想像である〟。」

人間は、ことばによって環境を知る、というのは、ある意味では正しいが、ある意味ではまちがっている。なぜなら、人間にとっては、すでに、ことばじたいが環境であるからだ。われわれにとっての環境とは、べつなことばでいえば、シンボル環境なのである。われわれは、シンボルにたいして鋭敏に反応する。「実在」の世界になまのままのかたちでわれわれがかかわりあうことは、すでに現実的に不可能になっているのではないか。実在の物理的環境のことを一次的環境、シンボル環境のことを二次的環境、と呼ぶ学者もいるが、われわれは、ことばを獲得することによって、[ウ]一次的環境の住民であることをゆるされなくなったのだ。

シンボルは、実在の世界と人間とのあいだに[エ]打ちこまれたクサビのようなものだ、といってもいいだろう。そのクサビによって、人間が環境に向きあう姿勢は、他の動物たちのそれとは、まったく異質な高まりをみせた。しかし、それだけに、人間は、

ときとして、みずからが実在とよそよそしい関係に置かれていることに不安と不満を感じたりもする。たしかな実在と、直接にかかわりあいたい、という欲求が、そんなときうまれたとしてもふしぎではない。石原慎太郎が初期の作品でえがこうとしたのは、そういう欲求を実現しようとする若者たちのすがたであった。無言のうちに、ただ肉体だけがはげしくぶつかりあうボクシング、荒れ狂う海とむきあうヨット――そこでは、実在と人間とのあいだにあるシンボルがかなりの程度まで脱落する。

しかし、(6)皮肉なことに、そういう状況をえがく小説という形式じしんが、もっとも高度に洗練されたシンボルの集積なのであった。(オ)非シンボル的な世界について語るためにも、われわれはシンボルを使用しないわけにはゆかないのだ。われわれは、どんなにしてみてもシンボル環境から抜け出すことができないようなのである。

（加藤秀俊『情報行動』による）

注

石原慎太郎……作家、東京都知事。若者たちの生態を描いた『太陽の季節』で、一九六六年に第三十四回芥川賞を受賞。

問一　空欄 X ～ Z に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、その符号をマークせよ。解答番号は X が 1 、 Y が 2 、 Z が 3 。

A　物理
B　論理
C　想像
D　超越

問二　傍線1「ネコにとって、環境とは、無言の実在世界そのものなのだ」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 4 。

A　動物は、自分自身に名前をつけることすらできない、ということ。
B　動物は、鳴くことはできたとしても、ことばを話すことはできない、ということ。
C　動物は、周囲の世界をことばによって認識することはできない、ということ。
D　動物は、ことばによる呼びかけに答えることはできない、ということ。

問三　傍線2「「もの」の世界」と同じ内容のものを、二重傍線ア～オからすべて選んだ場合、適切な組み合わせはどれか。次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 5 。

A　ア「密度の高い皮膜」――ウ「一次的環境」――エ「打ちこまれたクサビ」
B　イ「固い事実の世界」――ウ「一次的環境」――エ「打ちこまれたクサビ」
C　イ「固い事実の世界」――ウ「一次的環境」――オ「非シンボル的な世界」
D　ウ「一次的環境」――エ「打ちこまれたクサビ」――オ「非シンボル的な世界」

問四　傍線3「地球ぜんたいが、巨大な「耳なし芳一」なのだ」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 6 。

A　世界中のあらゆる場所に、それぞれ地名がつけられているということ。
B　ほとんどすべての事物が、ことばによって概念化されているということ。
C　名前をつけるという習慣が、宇宙にまで拡大しているということ。
D　ことばのもつ呪力によって、世界が守られているということ。

問五　傍線4「堂々と空中を闊歩しているのだ」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 7 。

A　ことばによって実在の世界から遊離しながら、そのことに気づかず平然と生活しているということ。
B　実在の世界に触れられないことに不満を抱きつつも、ことばを使う生活に満足しているということ。
C　ことばの世界が実在と異なるということを意識せず、現実から離れた生活をしているということ。
D　考えることのできないものについてさえ名前を与え、生活を概念化してしまっているということ。

問六　傍線5「つねに自分自身と語り合っているのである」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 8 。

A　人間は、他の人間とことばを通じてのみ語ることができるのだということ。
B　人間は、たとえひとりごとであっても頭の中でことばを用いているということ。
C　人間がこれまで恐れてきたのは、実在世界よりも人間自身だったということ。
D　人間が語ることができるのは、人間の考えた概念に対してだけだということ。

問七　傍線6「皮肉なことに」とあるが、なぜそう言えるのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 9 。

A　実在環境に直接触れたいという願望も、ことばを経由せずには表現しえないから。
B　リアルではあっても小説であるかぎり、それはフィクションにすぎないから。
C　肉体同士や自然とのぶつかりあいを表現するのに、ことばはそもそも不要だから。
D　小説が実在に迫るときにこそ、実在に直接触れたいという願いが生ずるから。

問八　次の中から本文の内容と合致するものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 10 。

A　人間は、生まれつき概念化の枠組から逃れることができず、実在世界そのものを見ることはできない。

B　文学の仕事は、人が知覚するものすべてに名前をつけ、環境全体をことばによって覆い尽くすことである。

C　ことばが環境を埋め尽くした現在、われわれはすべての実在をことばによって把握することができる。

D　対応する実在があるように見えることばでも、実在をそのまま写しているということはありえない。

(二)

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

空耳、というものがある。実際には音がしていないのに、音が聞こえたり、呼ばれてもいないのに名を呼ばれたような気がすることである。あるいは最近では、外国語の歌詞が変な日本語に聞こえたりすることも若い人たちのあいだでは空耳というそうで、それを集めた番組やサイトもあるという。

実は、それと同じようなことは目で見ていることに対しても起こりうる。それを仮にここでは「空目（そらめ）」という風に呼んでみたい。百聞は一見にしかず、あるいは、自分の目で実際確かめなさい、とはよく言われることだが、これまでたどってきたとおり、実は、私たちがこの目で見ていると思っていること自体、私たちの内部で、あらかじめ水路づけされたものの上に成り立っている。ただし、私がここでいう空目とは、全く存在しないものが見える、いわゆる幻視のことではない。本当は全く偶然の結果なのに、そこに特別のパターンが見えてしまうとき、それを空目と呼びたいのである。

私は、小さい頃から、自動車や列車の前面が、人の顔に見えてしかたがなかった。外車や改造車は、いかにもそれに乗っている人間に似て、居丈高な顔や怖そうな顔に。古い車は、間抜けなカエル顔に。世界は不思議な顔に満ちている。いつしか、私は、空目の画像をコレクションするようになった。

ジンメンカメムシ
（写真：海野和男写真事務所）

尊敬してやまない昆虫写真家の海野和男さん。彼の撮影したカメムシ。二人の、あまり強そうではないお相撲さんが仲良く並んでいる。ちょっと前には、アメリカですごいトーストが見つかった。トースト、つまりただの焼いたパンである。これが、オークションに出品されて二万八千ドルもの高値がつけられたという。なぜ？　それはトースト中央に、奇跡のマリア像が浮かび上がっているからである。すごい。なにがすごいかといえば、そう言われてみると、確かにそう見えるところが。これを買ったのはどんな人だろうか。今頃、パンはカビだらけになってしまっていないだろうか。

マリアだけではない。恩寵は私たちのすぐそばにある。[1]ただそれがあまりに身近すぎるところに起

こるというのもどうだろうか。マーマイト（というケチャップみたいな調味料）のフタの裏にもキリストは立ち現れるのだ。

一九九六年に打ち上げられたＮＡＳＡの探査衛星マーズ・グローバル・サーベイヤーが火星に最接近し、その表面の鮮明な映像を捉えた。そこには複雑で、奇妙な起伏が広がっていた。それをじっと眺めていると、そこには実にたくさんの人工的な意①ショウが隠されていることに気づく。ゴリラに似た横顔、ぬりかべ、マスクをかぶった怪人、はたまたオバQまで。実にさまざまな顔が潜んでいる……。

私たちは、本来、ランダムなはずのものの中に［　X　］を見出す。いや、見出さずにはいられない。顔は、火星の、あるいは岩壁の表面にあるのではない。私たちの認識の内部にある。

コンピュータ・グラフィック技術によって、非常に滑らかに変化する表面を描いたとする。たとえば、超未来的な宇宙船。恒星からの強い光を浴びて船首はまぶしく輝き、他方、船尾は暗い宇宙に溶け込んでいる。そんな画像である。コンピュータは計算によって、暗黒と輝きとのあいだに、濃淡の階調がほんのわずかずつ、精密に減少するような完全に数学的なグラデーションを作り出す。

むろん、人間の眼は、ある段とその前後の段との階調の差は、あまりにも微妙すぎて気づくことができない。つまりどこを見てもトーンジャンプを検出することはできない。だからこのようにして描出された宇宙船は、あたかも天使の布で磨きぬかれた大理石のように、かぎりなく滑らかで美しい表面を体現するはずである。理論的には。

ところが事実は全く異なる。このようにして正確に計算されて作り出された宇宙船は、しばしばギザギザや縞模様が浮かび上がった、極めて汚い表面をもってしまうのだ。

私は、このようなことをセガの技術者、平山尚氏が書いている一文を興味深く読んだ。一体、何が起こっているのだろうか。ギザギザや縞模様は、数学的な処理の問題に起因しているのではない。またコンピュータの液晶や画像表示の仕組みに問題があるからでもない。私たちの認識のあり方に由来するのだ。その証拠に、しばしばギザギザや縞模様は、ゆらぎ、あちこちに移動し、見るたびに変幻自在に動く。

おそらくそれは、私たちの内部にある眼が、あまりにも滑らかすぎる光景にいらだち、右往左往しているのである。そのあげくに無理矢理、境界線を、トーンジャンプを作り出し、そこに何らかの［Y］を見出すべく必死にもがいているのである。私たちの脳に貼りついた水路づけは、ここまでガン迷なものなのである。

網膜上にはたくさんの視細胞が稠密に並んでいる。それはちょうどデジタル・カメラの画素のようなもので、おのおのレンズを通してやってくる光の強度を認識する。視細胞は認識した光の強度を神経線維を通じて脳に伝える。一方、視細胞は互いに隣どうしの細胞と連携をとって、情報を交換している。ある視細胞にことさら強い光が入ってきたとする。この細胞はそれを信号に変えて、強い光が入ってきたことを脳に伝達する。そのとき同時に、隣の視細胞に対して、抑制的な情報を送る。「この光は俺が受け取ったから、おまえたちはそんなにさわがなくていいよ」と。ちょうど外野フライを捕球する野手が他の人間の動きを制するように。

するとどのようなことが起こるだろうか。周りが静まることによって、強い光を受け取った視細胞からの信号がことさら強調されることになる。つまり、コントラストがより明確化され、そこに境界線が作り出される。細胞と細胞のあいだのこのようなやりとり、つまり強い信号をより際立たせるための仕組みは、側方抑制と名づけられている。

全く同じように説明できるわけではないが、滑らかすぎる変化に、人工的なギザギザや縞模様が出現してしまう空目も、このような細胞間の側方抑制的な仕組みが作用していると考えることができる。輪郭のないところに輪郭を求めるあまり、視細胞は、変化する階調のあらゆる場所で、側方抑制をかけてははずし、かけてははずすことを繰り返して、縞模様を消長させているのだ。

かつて私は、私の本の若い読者からこんな質問を受けたことがある。なぜ、勉強をしなければならないのですか、と。そのとき、私は、十分答えることができなかった。もちろん今でも十分に答えることはできない。しかし、少なくとも次のようにいうことはできるだろう。

連続して変化する色のグラデーションを見ると、私たちはその中に不連続な、存在しないはずの境界を見てしまう。逆に不連

続な点と線があると、私たちはそれをつないで連続した図像を作ってしまう。つまり、私たちは、本当は無関係なことがらに、因果関係を付ヨ(③)しがちなのだ。なぜだろう。連続を分節し、ことさら境界を強調し、不足を補って見ることが、生き残る上で有利に働くと感じられたから。もともとランダムに推移する自然現象を無理にでも関連づけることが安心につながったから。世界を図式化し単純化することが、わかることだと思えたから。

かつて私たちが身につけた知覚と認識の水路(4)はしっかりと私たちの内部に残っている。しかしこのような水路は、ほんとうに生存上有利で、ほんとうに安心を与え、世界に対する、ほんとうの理解をもたらしたのだろうか。ヒトの眼が切り取った「部分」は人工的なものであり、ヒトの認識が見出した関係の多くは妄想でしかない。

私たちは見ようと思うものしか見ることができない。そして見たと思っていることも、ある意味ですべてが空目なのである。世界は分けないことにはわからない。しかし分けてもほんとうにわかったことにはならない。つまり、私たちは世界の全体を一挙に見ることはできない。しかし大切なのはそのことに自省的であるということである。

滑らかに見えるものは、実は毛羽立っている。毛羽立って見えるものは、実は限りなく滑らかなのだ。

(5)そのリアルのありようを知るために、私たちは勉強しなければならない。

(福岡伸一『世界は分けてもわからない』による)

注

NASA……アメリカ航空宇宙局
グラデーション……明暗や色調の段階的変化
トーンジャンプ……部分的に境界が出来て縞模様が見えてしまう状態
セガ……日本のゲームメーカー
神経線維(神経繊維)……神経細胞の突起

問一　傍線①～③のカタカナの部分の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれの群から一つずつ選び、その符号をマークせよ。解答番号は①が 11 、②が 12 、③が 13 。

① 意ショウ
A 国民のショウ徴
B 財務ショウの仕事
C ショウ知する
D 師ショウの教え

② ガン迷
A ガン固な性格
B ガン有量を計る
C ガン金を計算する
D ガン力を磨く

③ 付ヨ
A 未来をヨ見する
B 事件に関ヨする
C ヨ談が多い
D ヨ金をする

問二　傍線1「ただそれがあまりに身近すぎるところに起こるというのもどうだろうか」という表現には、筆者のどのような気持ちが表されているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 14 。

A 高貴な方々の姿形が、安っぽいものに出現することに対する罪悪感。
B 神聖なものが、卑俗なものの中に出現することに対する戸惑い。
C 聖なる人々が、日常品の中に出現することによって、汚れてしまうという不安。
D 尊い聖人の姿形が、本当に現実の世界に出現するのだろうかという猜疑心。

問三　空欄 X ・ Y に共通して当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 15 。

A　映像
B　認識
C　リアル
D　パターン

問四　傍線2「コントラスト」とはどういう意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 16 。

A　対照
B　対象
C　対称
D　対症

問五　傍線3「消長」の使い方として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 17 。

A　ランプが消長するのは、注意の合図である。
B　文明の消長は、歴史の中で証明されている。
C　彼の姿が消長してから、もう十年近くなる。
D　火事がようやく消長したので、ひと安心だ。

問六　傍線4「水路」という比喩の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 18 。

A　連続
B　存在
C　推移
D　関係

問七　傍線5「そのリアルのありようを知るために、私たちは勉強しなければならない」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 19 。

A　無関係なことに因果関係を見出そうとするヒトの習性を、学ぶことによって追求し、「空目」と呼ばれる現象について、いつかその成り立ちを解明しようとすること。

B　ヒトの認識の多くは妄想でしかなく、ほとんどが「空目」であることをよく理解し、その欠点を補うためには常に勉強し、努力をしなければならないということ。

C　ヒトが見ることのできる世界の姿は、常に一部分でしかないことを自覚し、そうであるがゆえに、理性的で冷静な思考と判断を心掛けなければならないということ。

D　滑らかに見えるものと毛羽立って見えるものが、実は同一のものであることを判断できるようにするためには、常に新しい知識を吸収する必要があるということ。

(三)

次の文章は『讃岐典侍日記』の一節である。作者藤原長子は嘉承二(一一〇七)年七月十九日に親しく仕えていた堀河天皇の崩御に遭い悲嘆にくれていたが、その悲しみも癒えぬうちに、白河上皇(堀河天皇の父)の御召によって今度は鳥羽天皇(堀河天皇の子)に再出仕することとなった。次は鳥羽天皇の即位を数日後に控え、作者の家も再出仕の準備に追われている同年十一月十九日の記事である。これを読んで後の問に答えよ。

十九日に(注一)、例の、参らんと思ふに、雪、夜より高くつもりて、こちたく降る。忙しさ、いまいくほど(注二)なく、残り少なくなりにたれば、おほかたの人も、1夜を昼になして、ものも聞こえぬまで急ぐめれば、われは、この月ならんからに忙しとて参らざらんがくちをしさに、出で立つを、ひとり承け引く人なし。2「さばかり忙しくしちらさせたまうてよかし。けふ参らせたまひたらん」に、院も大臣殿も(注三)、3よにいみじともあらじ。参らせたまはずとも、あしきこともあらじ。かばかり、雪は道も見えず降るめり。わが御身こそ、車のうちなれば、さてもおはしまさめ、御供の人は、いかでかたへんずるぞ」など、わびあひてとどめつれど、「人たちによしと思はれんとて参ることならばこそあらめ、この月ならんからに、忙しとて、①かくべきことかは。いさましくうれしきいそぎにてあらんだに、4それにさはるべきことかは。われを少しもあはれと思はん人は、けふは、参らせよ」といふままに、5けしきもかはるがしるきにや、いはれぬる人ども、「さばかり思しめし立たんこと、さまたげまゐらすべきことならず。車寄せよ」と供の人呼ばせなどするほどに、例始まるほど、と思ふほど、やうやう日たくるに、参らでやみなんずるなめり、と思ふ、くちをしくわりなきに、「人どもきぬれば。②とく」といへば、うれしくて乗りぬ。

道のほど、まことにたへがたげに雪降る。車のうちに降りいりて、雑色(ざふしき)、牛かひ、みなかしら白くなりにたり。二条の大路には、大宮の道もなきまで降る。

参りたれば、6人々、「あな、いみじ。例よりも日たけつれば、『けふは、え参らせたまはぬなめり。ことわりぞかし。忙しくおはしつらん』と申しあひたりけるに、7おぼろけならぬ御こころざしかな。けふは」と、あはれがりあひたり。

（注一）　堀河天皇の命日。毎月の命日には堀河院で追善供養の法会が行われる。
（注二）　鳥羽天皇の即位の日が迫っており、作者の再出仕も間近なことを言う。
（注三）　白河上皇。

問一　二重傍線①「かく」、②「とく」に漢字を当てるとすれば、どのような漢字が適当か。それぞれの選択肢から一つずつ選び、その符号をマークせよ。解答番号は①が 20 、②が 21 。

①　A　欠く　　B　書く　　C　掛く　　D　掻く
②　A　解く　　B　説く　　C　疾く　　D　溶く

問二　傍線1「夜を昼になして」とはどういうことか。次の中から最も適切なものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 22 。

A　昼と夜が逆転しているさま
B　昼も夜もないほど忙しくしているさま
C　夜なのに昼と勘違いしているさま
D　夜も昼のようににぎやかにしているさま

問三　傍線2「さばかり忙しくしちらさせたまうてよかし」は、現代語に直せば「いくらでもわれわれが忙しくなるようになさってください」というような意味だが、ここにこめられている発話者の気持ちとして当てはまらないものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 23 。

A　諦め（あきら）　　B　怒り　　C　同情　　D　皮肉

問四　傍線3「いみじともあらじ」とあるが、ここの「いみじ」とほぼ同じ意味の語を次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 24 。

A　「忙しとて参らざらんがくちをしさに」（2～3行目）の「くちをし」
B　「参らせたまはずとも、あしきこともあらじ」（4行目）の「あし」
C　「人たちによしと思はれんとて」（6行目）の「よし」
D　「われを少しもあはれと思はん人は」（7行目）の「あはれ」

問五　傍線4「それにさはるべきことかは」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 25 。

A　忙しさを法会不参加の理由にするわけにはいかない。
B　心躍る出仕の支度に差し障りがあってはならない。
C　出仕準備に忙殺されるのは歓迎すべきことではない。
D　法会参列を思いのままに実現することは許されない。

問六　傍線5「けしきもかはるがしるきにや」とあるが、「けしきもかはるがしるき」とはどういうことか。次の中から最も適切なものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 26 。

A　忙しさも峠を越えたことがはっきりしたこと
B　状況の異変が明らかになったこと
C　切迫した気持が顔色に明瞭に出たこと
D　空模様のいっそうの悪化が予想されたこと

問七　傍線6「人々」とは誰を指すか。次の中から最も適切なものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 27 。

A　御供の人々
B　作者の家の人々
C　鳥羽天皇に仕える人々
D　堀河院にいる人々

問八　傍線7「おぼろけならぬ御こころざしかな」にはどのような気持ちが表されているか。次の中から最も適切なものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 28 。

A　意外なまでの執着心を不審に思う気持ち
B　切実な思いからする行動を哀れむ気持ち
C　身勝手な振る舞いに対して不満を抱く気持ち
D　無理を押して思いを果たしたことへの称賛の気持ち

問九　本文中の作者についての説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 29 。

A　鳥羽天皇への出仕には積極的な気持ちになれぬまま、あくまで故堀河天皇への追慕を募らせている。
B　鳥羽天皇への出仕は気が進まぬながら、心を奮い立たせて自分の役割を懸命に果たそうとしている。
C　鳥羽天皇への出仕を歓迎すべきこととしながら、その準備に忙殺されることにいささか閉口している。
D　鳥羽天皇への出仕を心待ちにしながら、一方では故堀河天皇を追慕する心を整理できないでいる。